

## 各講座の概要とテキストについて

テキストは事前に各自でご用意ください。

No.	科目名	概要
1	カトリック教会の悪魔祓い ～歴史・神学・実践～	<p>本講座では、映画などで広く知られるようになったカトリック教会の悪魔祓い（エクソシズム）について、その実体を歴史・教義・法制・典礼祭儀の側面から解説します。そのなかで前提となる天使論・悪魔論についての聖書的、教義的理解についても触れます。さらにエクソシストとしての実務経験を踏まえ、教会の伝統的なエクソシストの役割の現代的な意義を探ります。特に精神的疾病や心理学的問題とエクソシズムとの関わりなど具体的な現代社会の状況との関係性についても検討を行い、エクソシストの働き、悪魔祓い儀式の今後の可能性について考えたいと思います。</p> <p><b>【参考資料】</b>            田中昇 『エクソシストは語る エクソシズムの真実』 集英社 (2,530円) ISBN 978-4-7976-7459-0            田中昇 『カトリック教会の祓魔式』 [南山神学46号97-210頁]</p>
2	アウグスティヌスの神学	<p>キリスト教の思想的発展に多大な影響を残した四世紀から五世紀に生きた古代キリスト教最大の思想家、ヒッポのアウグスティヌスを取り上げ、彼の神学について概観します。まず、彼の著作『告白』をもとにその生涯をたどり、特に、「知と信」の問題、すなわち、信仰と理性認識の関係について考えます。次に、それを踏まえてアウグスティヌスの神学における主要なテーマ、三位一体論、ドナティスト論争、ペラギウス論争、『神の国』と歴史神学、時間論・記憶論等の哲学的思索、そして、教皇レオ十四世が、アウグスチノ会のご出身であることに敬意を示して『アウグスチノ会則』を取り上げて講義します。</p> <p><b>【テキスト】</b>            アウグスティヌス 『告白Ⅰ』 中央公論新社 (1,210円) ISBN 978-4-12-205928-3 / 『告白Ⅱ』 (1,210円) 978-4-12-205929-0 / 『告白Ⅲ』 (990円) 978-4-12-205930-6</p>
3	生き方としての哲学へ	<p>哲学は各時代において、普遍的な問いを探究しつつ、その時代を生きる人間の具体的な生の営みと不可分に結びつき、同時に様々な教育実践とともに営まれてきました。本講座では、哲学がもっていたこうした実践的な側面に光を当てながら、西洋哲学史を教育という切り口からたどりなおします。具体的には、近代哲学の出発点と考えられているデカルトの思索の背景に焦点を当て、近代の哲学の背後にある中世哲学的伝統、さらには古代の哲学的営みへと教育を媒介としながら遡りながら検討したいと思います。古代から近代への歩みを受講者の皆さまとたどりなおすことで、哲学が各時代において「生き方の実践」としてもっていた意味を浮き彫りにできれば幸いです。</p>
4	ニカイア公会議後の三位一体論	<p>本講座では、ニカイア公会議後の三位一体論について学びます。主にニカイア公会議（325年）から第一コンスタンティノポリス公会議（381年）に至るまで、どのように三位一体論論争が展開されたのかを見ていきます。本講座の構成は以下の通りです。①ニカイア公会議前の三位一体論の展開、②ニカイア公会議（325年）、③325年～340年における三位一体論論争、④340年代の教会会議における三位一体論論争、⑤350年代の教会会議における三位一体論論争、⑥360年代の教会会議における三位一体論論争、⑦カッパドキア三教父の三位一体論、⑧第一コンスタンティノポリス公会議（381年）</p>
5	イザヤ書を読む	<p>イザヤ書は、前8世紀後半のエルサレムで活動したイザヤの預言と、その精神性を継承する後代の人々が書き継いだテキストを編集した文書です。その壮大な神学的構想と文学的完成度から、旧約聖書では最も重要な預言書と見なされてきました。特に、イザヤ書のメシア預言や「苦しむ主の僕」のテキストは、新約聖書のイエス・キリスト像の形成に決定的な影響を与えました。イザヤ書が存在しなかったら、キリスト教は成立し得なかったかも知れません。その意味で、イザヤ書は世界史的な意義を有する文書です。講義ではイザヤ書から重要なテキストを取り上げ、そのメッセージを学びます。</p> <p><b>【テキスト】</b>            イザヤ書が収録されている邦訳聖書（新共同訳、聖書協会共同訳など）。邦訳の種類は問いません。新規に購入する方は『聖書協会共同訳・旧約聖書続編付き・引照・注付き』を推薦します。</p>
6	宗教科教育法26-1 祈りを学ぶー理論と実践	<p>宗教科を教えるための基盤となる「祈り」について、理論と実践の両方で学べるように配慮する。様々な祈り：黙想、観想、念祷、ロザリオの祈りなどについて、歴史的背景とともに学び、実践を通して宗教科教育や学校行事などに取り入れることができるように解説する。また学校教育におけるミサについても取り上げ、共同体的祈りの頂点であるミサの意味と、実際に学校で行うミサやみことばの祭儀の可能性について考察する。現代世界において若者達が数多く参加するテゼ共同体についても学び、その祈り方、祈りの精神を学校での宗教教育に取り入れる方法も模索してみたい。</p> <p><b>【テキスト】</b>            R.ドグレール/J.ギンシャル著 伊従信子訳            『神と親しく生きる いのりの道ー幼きイエスのマリー・エウジェンヌ師とともに』 聖母の騎士社 (550円) ISBN 978-4-88216-307</p>

7	宗教科教育法26-2 物語の力	本講座は「宗教」の授業に必要な知識と技法を学び、適切な授業を行う実践力を養うことを目的とする。そのため、本講座は講義中心ではなくワークショップ形式を用いる。授業でも応用できる作業のほか、ペアワークやグループワーク、ミニ模擬授業を行い、他の受講生と共に「より良い宗教の授業とは何か」を実践的に学び合う。主な内容として、聖書が持つ「物語」の力に着目する。「物語」は断片的な日々の出来事を「意味」へと統合する力として、生徒一人ひとりの体験を聖書という「大きな物語」に位置づけ、新たな視点から生きる意味と目的を回復させる。守らねばならない道徳的な訓話ではなく、生徒の生きる力を育む聖書の学びを探究したい。
8	宗教科教育法26-3 カトリック教育を実践すること	「世俗の時代」といわれる現代社会において、カトリック学校の宗教科の授業は何を、どのように語り得るのでしょうか。本講座ではまず、現代社会の文化的・思想的な諸性格を分析し、私たちが生きるコンテキストの輪郭を明らかにします。そのうえで、そうした現代的な観点を問い直すような宗教科の授業をいかに構想し得るかを、聖書を用いた方法、聖書以外のテキストを用いた方法、キリスト教外のコンテキストと接続する方法等の観点から、具体的かつ協働的に検討します。この過程を通して、各受講者がカトリック教育の実践者としての自らの視座と方法を主体的に形づくることを目指します。
9	キリスト論概説：古代から現代まで	<p>「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」（ルカ9・20）というイエスの問いはこの2000年間、キリスト教において常に繰り返され、深められてきました。この講義では、その過程と多様性を幅広く概観しつつ、現代に生きる私たちがどのようにイエス・キリストと出会っていきけるのかを模索していきます。キリスト教系の学校において宗教を教える際にはキリスト論に関する基礎知識が必須となりますが、この講義はそのような素養を身につけるためにも役立ちます。</p> <p><b>【テキスト】</b> 聖書をお手元に用意してくださいと授業を深く理解するために役立ちます。</p>
10	宗教科教育法26-4 AI時代の宗教科教育	本講座は「宗教」の授業に必要な知識と技法を学び、適切な授業を行う実践力を養うことを目的とする。本講座は講義中心ではなく、ワークショップ形式を用いる。授業でも応用できる個人作業のほか、ペアワークやグループワーク、ミニ模擬授業を適宜行い、他の受講生と共に「より良い宗教の授業とは何か」を実践的に学び合う。今日AI技術は人間のアイデンティティとは何かを宗教教育に問いかけている。人間の知能はアレゴリズムによる人工知能とは異なる。人間の知能を還元主義的に分節化せず、身体全体の営みと捉え、批判的思考と良心を育てるために、知識伝達を超えた「対話」による関係性を軸とする宗教教育を探究する。
11	キリスト者であることの現代的省察	カトリック学校の宗教教育の目的は、信者数を増やすことにあるのではないと言われて久しい。一方で、キリスト者であること、あるいはキリスト教の信仰を生きることが、現代社会においていかなる意味があるのかという問いに向き合うことは、依然として重要であると思われる。福音がどのような「私」になるかと同時に、どのような「私たち」になるかという問いにインスピレーションを与えないのであれば、それは生きたメッセージとして児童生徒学生に届かないであろう。本講座は、ティモシイ・ラドクリフ『なぜキリストチャンになるの』を一つの参照軸に、さらに、近年のカトリック教会の議論を踏まえつつ、自由、幸福、他者と共に信仰を生きることについての考察を紹介し、参加者と共に議論の場を持ちたい。
12	ガウディ没後100年における教会共同体の神学	私たちは2026年にスペインのカタルーニャ地方の建築家アントニ・ガウディ（Antoni Gaudí i Cornet；1852－1926年）の没後100周年を祝う。特に、1882年から今日に至るまで144年間の長きにわたって建設が続くバルセロナのサグラダ・ファミリア大聖堂（聖家族贖罪聖堂）全体がかもし出す聖書の読み解きと信仰の伝承の具体化をたどることで、私たちも地球という故郷において、神のもとで兄弟姉妹となる全人類の動向を視野にいれつつも協力して補い合う新たな聖家族になれるだろう。本講座では「ガウディの生い立ち」・「ガウディの学び」・「ガウディの建築」・「ガウディの信仰」を順にたどることで、聖家族の思想的な意味について教理学の視点で紹介する。
13	秘跡各論B－結婚の秘跡	ローマ・カトリック教会には秘跡が七つあります。婚姻はそのうちの一つです。『カトリック教会のカテキズム』は婚姻を「交わりをはぐくむための秘跡」と位置付けています。「男女が相互に全生涯にわたる生活共同体を作るために行う婚姻の誓約は、その本性上、夫婦の善益と子の出産および教育に向けられています。受洗者間の婚姻の誓約は、主キリストによって秘跡の尊厳にまで高められました」（カテキズム#1601）。「叙階の秘跡」のように、「結婚の秘跡」も奉仕することを目的とします。この講座の中で、結婚の内容を教会法の立場からではなく、秘跡性の立場から取り上げます。具体的には結婚の秘跡を歴史的に追うものとなります。したがって、第1部は歴史的考察であり、第2部は体系的考察であります。このように考察することによって、秘跡として成り立つための結婚の重要な要素を学ぶことになります。
14	愛の思想史2：聖書における愛	<p>キリスト教は「愛の宗教」と呼ばれるが、聖書が語る愛の内実は、自己犠牲という一面的なイメージには収まらない。旧約聖書には、創造主が被造物を慈しむ愛、契約に基づく相互の誠実な愛、雅歌に溢れる情熱的な愛など多様な愛が息づいている。新約聖書では、イエスによる「敵を愛せ」という常識を覆す教え、パウロの愛の讃歌、ヨハネの「神は愛である」という根源的な宣言が展開される。こうした多様なテキストを丁寧に読み解くと、聖書の愛が単なる道徳的規範ではなく、人間存在の根底を揺り動かす力を持った思想であることが見えてくる。こうした観点に基づいて、本講座では、聖書の原典に即しつつ愛の思想の全体像とその現代的意義を考察する。</p> <p><b>【テキスト】</b> 山本芳久 『宗教のきほん「愛」の思想史』 NHK出版 （1,980円） ISBN 978-4-14-081908-1</p>